

## 尾張藩士朝日文左衛門の描く妻の身体と外出行動

溝 口 常 俊

### はじめに

恐らく名古屋の歴史の中で燦然と輝いていた時代は、尾張藩 7 代藩主徳川宗春の世(1730-39)の享元絵巻の時代であろう。その時代の魁となる元禄～享保時代を活写したのが尾張藩御城代組同心、御畳奉行の朝日文左衛門重章である。彼が綴った日記のタイトルを『鸚鵡籠中記』<sup>1)</sup>という。

『鸚鵡籠中記』(以下、籠中記)は『名古屋叢書』続編(1966)<sup>2)</sup>に収録・公刊されて以来、様々な分野の研究者に利用され、昭和元禄といわれたバブルの絶頂期に神坂次郎により『元禄御畳奉行の日記』(中公新書、1974)<sup>3)</sup>と題して出版されると同時に大衆に知れわたる日記となった。ここでは「元禄に生きた酒好き女好きのサラリーマン武士が無類の好奇心で書きのこした希有の日記」と帯書きされているように、筆まめだがうだつが上がらない酒好き女好きという文左衛門のイメージが作り上げられた感がある。

研究者の中でも、「彼自身が観劇に熱中した様子、飲酒の上での失敗の数々、女性関係での問題が赤裸々に筆記されている点からすると、甚だ凡俗な性格の人物であったと思われる」と小池富雄は評し<sup>4)</sup>、文左衛門の結婚生活に詳しい林由紀子は「徹底した芝居好き、酒好き、遊び好き、とりわけ女遊びが好きという男であった。……離婚の原因は、やはり度重なる夫の浮気と妻の嫉妬であった。……娘を嫁がせる年齢になっても文左衛門の女癖の悪さは治らない。今度はまた女中のえんと通じた」と述べるように<sup>5)</sup>、文左衛門の評判ははなはだよろしくない。

こんな文左衛門が、額面どおりふしだらな男であり続けたのか、妻達と如何に接してきたのであろうか、こうした疑問を解き明かすとともに、彼が描いた先妻けい、後妻すめに注目することによって、当時の武士の妻達の身体と日常生活上の外出行動を明らかにすることを本稿の目的としたい。

### 1 分析方法

『籠中記』は尾張藩士・朝日文左衛門重章が、貞享元年(1684)8月29日から死の前年にあたる享保2年(1717)12月29日までの34年間書きつづった日記である。ただし、このうち文左衛門19歳の元禄4年(1691)6月13日以前のは父・定右衛門の手記とされているので、自筆分は元禄4年から享保2年までの26年間ということになる。

本研究は、この自筆分を分析対象としたものである。基礎作業として、市橋鐸監修の『名古屋叢書続編』で翻刻された全文を年月日別にデータベース化を行った。このデータベースをもとにして、初めて様々な研究目的別の計量的な分析が可能となる。たとえば、文左衛門の芝居見学、釣り、友人宅訪問、火事場見学<sup>6</sup>などの行動を時間的、空間的に追うことができ、地震、風水害などの自然災害の場所、日時も瞬時に把握することができる。また、日記に登場する全人物の行動も検索可能となる<sup>7</sup>。本稿は、このデータベースを使って、文左衛門の2人の妻の全記述箇所を年月日順に抜き出し、その記載内容を検討したものである。

## 2 朝日文左衛門家の人々

### (1) 文左衛門の略歴

朝日文左衛門の略歴を尾張藩士の系譜集『士林泝洄』を検討した小池富雄の紹介をもとに『籠中記』から読み取れる家族関係部分を加味して次に示しておきたい。

延宝2年(1674)、1歳：尾張藩御天守鍵奉行、朝日定右衛門重村の3男として出生。兄2人は早生。幼名は甚之丞または亀之助。

延宝9年(1681)、8歳：2代藩主徳川光友に初めて「御目見」をする。

元禄5年(1692)、19歳：文左衛門と改名。

元禄6年(1693)、20歳：朝倉忠兵衛娘・けいと結婚。父・定右衛門隠居願を出す。

元禄7年(1694)、21歳：家督、知行百石を継ぎ、城代組・本丸番に就く。

元禄8年(1695)、22歳：長女・おこん出生。

元禄11年(1698)、25歳：深井丸番に就く。

元禄12年(1699)、26歳：普請役に就く。

元禄13年(1700)、27歳：畳奉行に就き、役料40俵を受ける。

元禄16年(1703)、30歳：女中・れんが墮胎する。

宝永2年(1705)、32歳：1月妻・けいと離婚。11月りよを客分として迎え入れる。

宝永3年(1706)、33歳：足軽頭に就く。りよを正式な妻とする。

宝永4年(1707)、34歳：妻・りよ、死産。

宝永5年(1708)、35歳：定右衛門と改名。妻・りよ、改名してすめとなる。

宝永6年(1709)、36歳：妻・すめ、死産。先妻・けいと娘・おこんの結婚。

正徳元年(1711)、38歳：妻・すめ、娘・あぐりを出生。

正徳4年(1714)、41歳：父死去。

正徳5年(1715)、42歳：母死去。

享保2年(1717)、44歳：孫・亀之助(おこんの長男)出生。

享保3年(1718)、45歳：病没。

この略歴を若干補足しておきたい。宝永2年1月に妻・けいと離婚したが、その理由に関してはこれまでの研究、文献では文左衛門の酒癖、女癖が悪かったことによるものと論じられている。けいとの間生まれた娘・おこんは文左衛門が引き取った。けいと離婚後、まもない翌年の宝永3年9月には古田勝蔵の義妹・りよを嫁にもらった。妻・りよとの間には2度の死産を乗り越えた後、正徳元年11月に娘・あぐりが誕生した。なお、けいと娘・おこんは、宝永6年に水野久次郎のもとに嫁いでいった。享保2年6月にはおこんと久次郎の間に初孫・亀之助が誕生したが、その数年前に両親はひ孫の顔を見ることなく相次いで他界し、文左衛門自身も亀之助をあやす間もなく、同年12月に『籠中記』を絶筆し、翌、享保3年9月に若干45歳で生涯を終えることになった。

## (2)文左衛門家の人々

朝日文左衛門の家系図(図1)を示しておきたい。父、定右衛門は朝日家、母は渡辺家である。先妻けいの父は朝倉忠兵衛で、文左衛門の若き日の弓の師匠であった。けいの母は松井家である。けいとの間生まれた娘おこんは成人して水野久次郎家に嫁ぎ、文左衛門の初孫の亀之助をもうけた。後妻りよ(後、すめと改名)は古田勝蔵の義理の妹であり、文左衛門の次女になるあぐりをもうけた。

文左衛門が先妻けいと後妻りよ、さらには両者に関係の深いこれらの人々を如何に日記に登場させ、いかに描いているかを次に詳述し、かつ文左衛門自身が彼らと如何に行動を共にしたかを明らかにしたい。

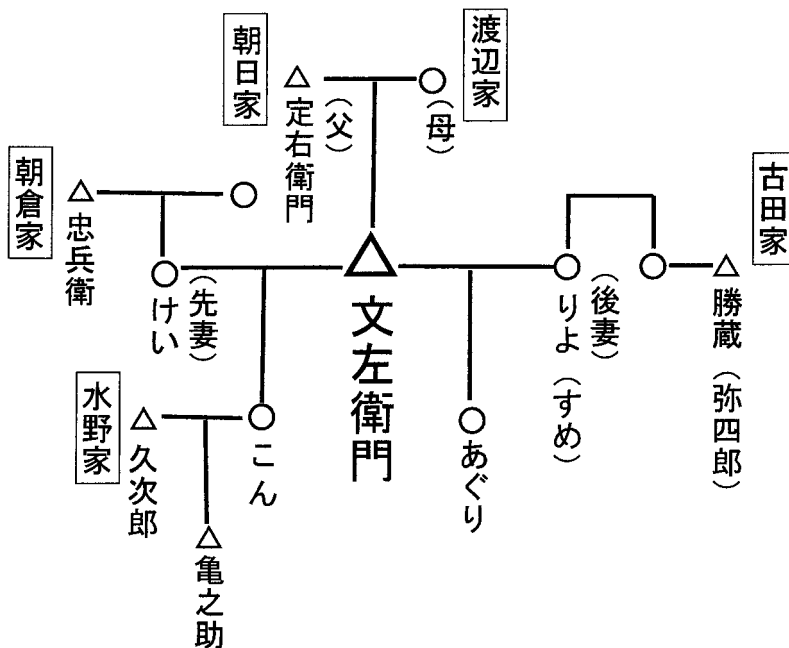


図1 朝日文左衛門の家系図

表1 先妻けいの籠中記への登場回数

	元禄6年	元禄7年	元禄8年	元禄9年	元禄10年	元禄11年	元禄12年	元禄13年	元禄14年	元禄15年	元禄16年	宝永元年	宝永2年	計	
	1693	1694	1695	1696	1697	1698	1699	1700	1701	1702	1703	1704	1705		
親戚・知人訪問	朝倉忠兵衛	1	5	5	6	8	5	4	4	9	4	2	2	1	56
	渡辺源右衛門	1	4	1	1	3	1	1	1	1	2	2	1		19
	渡辺覚右衛門	1	7	1	1	1	1								12
	渡辺七内					1					3		1		5
	市川武兵衛					1	1	1		1			1		5
	柴山弥左衛門								1	1		1	1		4
	松井重兵衛	1	1	1											3
	渡辺久太夫(弾七)								1				1		3
	朝倉才兵衛	1						1						1	2
	渡辺平兵衛						2								2
	関加兵衛									2					2
	久左衛門												2		2
	その他6人計				1			2	1	1	1				6
寺社参詣	熱田神宮	1	1	1	2		1		1					7	
	津島神社					1								1	
	笠寺観音								1					1	
	荒子観音									1				1	
	建中寺		1											1	
行楽等	八事								1					1	
	長島町													1	
	湯浴				1									1	
身体	芝居見物								1					1	
	病氣・身体贈り物	2	5	16	3			1	7					34	
計	8	25	27	15	15	11	9	9	27	12	5	9	1	173	

### 3 先妻「けい」の外出行動と身体

#### (1)けいと文左衛門の出会い

『籠中記』全データベースから、日記に登場した「けい」\*の記載箇所をすべて抽出すると、結婚生活13年間(元禄6年～宝永2年)で、延べ173日にのぼった。それを行動目的別にまとめなおしたのが表1である。ほとんどがけいの外出に関する記載で、各年ともに親戚・知人宅訪問回数が最多で、その他としては年1、2回の寺社参詣、行楽地訪問がみられるに過ぎない。外出以外の記載においては妻の身体、とくに病気に関する記述が、元禄6～9年、同13、14年に限られるが延べ37日間なされているのが注目される。

文左衛門にとってけいは彼の弓の師匠朝倉忠兵衛の娘故、なじみの顔であったが、出会いの場面は書かれていない。いきなり花嫁道具が運ばれてきたことが、元禄6年4月19日に記されている。「曇、未刻到晴。今宵朝倉忠兵衛処到、娘の道具を越す。親類来り賀し、僮僕酒蘭也」とある。21日が結婚式で、籠にのって花嫁登場。花婿も籠にのった。その後しばらく、文左衛門自身、両家親族の挨拶まわりがつづいた。新婦けいは半月後の5月6日にやっと「おけい・忠兵・平右、重兵処へ行」という記載で登場し、けいと父の朝倉忠兵衛と朝倉平右衛門が、母方の伯父にあたる松井重兵衛宅を訪問している。13日後の5月19日に、けいは夫・文左衛門とその両親と共に文左衛門母方の渡辺源右衛門宅に振廻に行く。朝日家へ嫁いだ事の顔見せで、「座頭二人来る。芸を尽す」とあるから、結婚式の行事がまだ続き、その一環としてお祝いがなされたものと推測される。

結婚後のけいは文左衛門によって如何に書き留められていたのであろうか。記載のもっとも多かった外出行動を中心にその詳細を示しておきたい。

## (2)けいの外出行動

### 1)親戚宅訪問

新妻けいに関する記載はそのほとんどが親戚宅訪問であり、結婚生活 13 年間の全外出日 136 日の内、実家である朝倉忠兵衛宅への帰省が 56 日 (41.2%) とその半数を占めている。続いて文左衛門の母方の伯父達宅 (渡辺源右衛門 19 日、覚右衛門 12 日、七内 5 日、久兵衛 3 日、平兵衛 2 日) への訪問が多く、計 41 日 (30.1%) を数える。この両者で約 70% を占め、特に忠兵衛と源右衛門宅へは毎年必ず訪れている。

実家、忠兵衛宅訪問の初出 3 回をあげれば、元禄 6 年 9 月 10 日「母と慶、忠兵衛へ行く。慶は泊。明十一日直に熱田へ参詣す」、同 7 年 1 月 16 日「今日、母・慶・予、渡辺弾七とともに朝倉忠兵衛へ行く。夕飯給」、同年 3 月 5 日「慶、忠兵衛へ行。明日迄宿す」のごとくである。けいにとってみれば、年数回実家に帰させてもらえ、且つ、宿泊も出来たととなると、結構息抜きができたものと思われる。少なくとも武家の家に嫁したとしてもその家に閉じこめられてはいなかったようである。病の時は数日間も実家にもどり、そこへ文左衛門が見舞いに行ったりしている。「今日忠兵衛へ行く。慶、病昨日ヨリよく気色もよし」(元禄 7・5・16)。

### 2)寺社参詣・行楽

寺社参詣は、毎年 1 回熱田神宮へ参拝している以外は、あまり多くなく、結婚生活 13 年間に津島神社、笠寺観音、荒子観音、建中寺へ各 1 回出かけているに過ぎない。その他の外出として物見遊山、芝居見物などの行楽があるが、「母・けい・かつ・武兵衛等いかつ山及八事へ行く」(元禄 14・7・9) があるにすぎなく、文左衛門があればほど足繁く通った芝居見物についても「母并けい女等、筑後芝居見物」(元禄 15・2・10) とわずか 1 日記されているに過ぎない。かくして、武士の妻達女性達は、寺社参詣、芝居見物などの行楽は相当の楽しみであったには違いないが、ほとんどそのための外出行動はしておらず、外出の楽しみはもっぱら実家・親戚訪問という形で行われていたといえよう。

ここで、親戚・知人宅および寺社参詣・行楽などの外出行動に関して、注目すべき行動様式が見いだされたので示しておきたい。それは、けいが単独で外出することは少なく、その多くが複数で連れ立って出かけていたことである。けいの総外出回数 136 回中、文左衛門家揃って (日記の「家内」をそう判断した) 出かけたのが 32 回、2 人連れで出かけた中では、文左衛門の母と 18 回、夫の文左衛門と 10 回、召使いなど他人と 4 人で、3 人連れでは夫・母とが 10 回、父・母とが 9 回、母・他人とが 3 回、夫・他人が 1 回で、4 人連れでは父・母・夫と 6 回、父・母・他人が 2 回となっている。この合計が 95 回で、けいの単独外出 40 回の 2 倍強である。けいの単独での行き先は殆ど (33 回、83%) が実家の広井町で、名古屋城下の広小路通りを約 40~50 分歩

いて行けるなじみの通路であった。こうした安心して通えるところ以外は、誰かが付き添っていたことになる。そのほとんどに母親（85%）か夫の文左衛門（72%）が連れ立っており、この2人に暖かく見守られていたのである。

### (3)けいの身体一出産・病気一

外出に関する記載には回数の上で及ばないが、けいの病気に関してかなり詳しく気遣って書かれている。登場日数は34日で、出産（元禄8年）と疱瘡（元禄14年）にかかった年に記載が集中している。以下、両年の前後を含めて全記載を掲げながらその状況を明らかにしていきたい。

#### 1)出産

元禄6年（1693）8月6日に初めて、けいの病状の記載が「同夜 丑之時に慶食傷吐する事、三度」と出て、それはつわりではないか「慶食不進。俗に云つばりかと」（8.9）としている。しかし、その後妊娠したとの記載のみならず、病状に関しての言及は、翌7年5月までなされていない。5月14日に「予今日忠兵へ行。母も夕飯後に行。慶少數煩に依而也」と煩によって、けいが実家の忠兵衛宅に帰っており、それを文左衛門と母が見舞いに行っている。15日には人を忠兵衛宅に見舞いに行かせ、「今日忠兵処へ人を遣し、慶の病を問に、今日食曾不進悪しと、予甚た案し。夜食不進。積鬱充胸」のように自身は心配して夜食が進まないと記している。続いて16日、22日と見舞いに出かけ、けいの回復具合を次のように述べている。「今日忠兵処へ行。慶、病昨日ヨリよく気色もよし」（5.16）、「予四ツ過に出、両度御目見不仕。直に忠兵へ行。慶・気色能して如平生の夕飯。後母、忠兵へ行」（5.22）。

9月に入って「母・予・慶・角右衛門処へ行。夕飯給。同夜、御慶吐逆す」（9.13）、「京庵来り、御慶脉を診す。食傷歟」（9.14）とあり、それが26日に妊娠5カ月であることがわかる。その日のお祝いぶりは「今日御慶帯を結。懐胎満五月。源右衛門女房来り眉を剃落し仮に帯を結。後取上婆来り、加減能しめ結。強飯を蒸す。客衆朝倉忠兵衛 おそでは先日ヨリ来る・渡辺角右衛門・同平兵衛・同源右衛門・同妻・同源之助・同弾七・同七内・貞三。食汁 鯛ちさ 皮牛房・鱈 鯉 栗薑 九年母ぬた・焼物赤眼魚 是忠兵ヨリ来る・煮物くづし 冬瓜 川たけ 山のいも・香の物・酒の肴大章魚醋にて・柚味噌・熬物 満鴨 麩・吸物 鱈・水の物 栗梅干 なし・吸物 赤みそ へそ おろし 干芋の葉・取肴 するめ・醴酒」のように賑やかである。多数の親戚を呼び、海の幸・山の幸を肴に大宴会が開かれたことがうかがわれる。

その後しばらく、ケイの体調がよくなったのか、日記にふれられることはなかった。しかし、翌、元禄8年1月19日から産みの苦しみが始まる。「夜、御慶、少し虫の気味有と」（1.17）、「予忠兵へ行。御慶産の催し有故、夜一宿す。母も日暮に来り、一宿す。医師前山桂隆・中嶋道策来る。山田勘左衛門・朝倉勘助も一宿す」（1.18）、「御慶催し一両度もあれ共不産。暁方に前山桂隆来る」（1.19）、「御慶昨夜迄は身もひへ虫あらゝかにこほり、殊之外術ながり、うなりしが、道庵薬ヨリ身温り、虫も透とこは（ば）らず、食も随分進み、今夜も奥にて高咄等にて晒声有。予是

を聞て欣然たり。予・平三郎・勘左一宿す。なら茶を給」(1.22)、「御慶氣力能故に、忠兵に稽古など有」(1.23)、「申半時御慶少し腹痛み、少敷手振ふ両医談合にて和氣飲を用ひ、忽に正に復す」(1.26)。それも1月28日からは安定し、「夕飯後、予、忠兵へ行。御慶常のこつく髪を結。予欣然たり」(1.28)、「夕飯後、予忠兵へ行、御慶氣色益快」(2.1)、「御慶氣力益よし」(2.4)、そして、3月10日に待望の長女おこんが誕生した。「巳刻、御慶安産。女子共に無恙。忠兵衛は不産前に、岩屋平右衛門処へ行。予、昼過広井へ行。申刻母来る」(3.10)とある。4月23日に文左衛門は伊勢参宮の帰りに桑名で妻に櫛を購入している。「快晴。夜明出宿。予四日市迄駕籠に乗。未刻桑名へ着。予為妻、玳瑁之櫛を買 七匁五分 熱田の返り船に乗、薄暮熱田へ着 船頭に錢二百文遣す。酉五刻飯宅」(4.23)。生涯、文左衛門が妻へのプレゼントを記したのはこの日のみであり、出産という大事業をなし終えた妻に対して感謝していたことが伝わってくる。

ただ、けい自身は産後の肥立ちがよくなく、1、2カ月の間、口に腫れ物ができたり、熱のため壁を貫くほどのうなり声が出たりして苦しんでいる。「御慶、口中腫物有熱。昨日ヨリ京安薬を服す」(5.2)、「兼康・意丹・山田京安来り、御慶脉を診し、薬を調合す」(5.3)、「頃日召仕之女つや暇を乞にヨリ為談合、御慶広井へ今日行、暮に飯る筈といへ共口中痛により宿す」(5.14)、「御慶微熱有。気色不快」(6.21)、「申刻御慶大熱。日暮前殊に甚し。うなりの声突壁」(6.22)、「御慶少し熱醒」(6.23)、「御慶熱醒。予今朝大田元右に玉薬をもらひ、鉄炮場にて始て小見当を三つ打」(6.24)。

以上示したように、けいの出産前後のけい自身、ならびに文左衛門の行動から次のような夫婦の絆を読み取ることができよう。まず、けいの行動に注目すれば、病の時、特に妊娠中の体調の悪い時に実家に帰っていたことは、安心して出産にそなえることが整えられていたということで、武士の生活の中で「里帰り」が認められていたことがわかる。実家に里帰り中の妊婦を気遣って、夫の文左衛門と文左衛門の母が見舞いに行くという思いやりもみられる。

## 2) 痲瘡

出産後の4年間は、元禄9年4月に食傷して吐逆したことを除いて、けいの病気を示す記載は一切なかった。4月4日に「申刻過、御慶食傷し吐逆す。戌刻後藤玄隆を招、針を立さしむ。子半点京安来り薬を服せしむ。吐逆爰に至り不止、漸して熱出、熟眠す。昨日若めを酢味噌にて食ふ是故か」とあるも、翌日には「御慶氣色大方快」(4.5)、「御慶氣色全快」(4.6)のように回復している。

ところが、元禄13年10月2日に「ケイ依禽妬出。斜吾心憂鬱し。如不可堪。且懼る」とあり、けいの身体・心に変化が見え始めてくる。嫉妬である。これは文左衛門の浮気が原因であり、非は文左衛門にあるのだが、憂鬱になり、恐ろしかったようである。翌14年2月7日から、けいの頭痛が甚だしくなり、医者にみてもったら痲瘡と診断された。「けい頭痛甚し」(2.7)、「夜更ヨリ雨。けい頭痛甚し。熱も有之」(2.8)、「けい弥熱頭痛甚き故、通庵を呼て見せしむ」(2.9)、

「晴、けい疱瘡也」(2.10)。その症状は、顔にも手にも湿疹ができ、膿も熱もでて、相当に痛かったようである。「けい顔及び手之疱瘡、膿故熱も有。痛し痛しと堪かぬ」(2.14)。湯漬け、酒湯療法のかいもあってか、病状は回復に向かい、「けい今迄食一日、一夜に中碗ゆづけ三度、四度宛也。今夜は気色よくして、術ながらず」(2.17)、「けい酒湯。夫ヨリ気色弥快し」(2.18)、担当医に礼金一分を払っている。「通庵へ金一分遣す。けい疱瘡等を療する故也」(7.8)。

当時、疱瘡(天然痘)は死者も多く、世間で最も恐れられていた病気の一つであった。文左衛門もその流行に関して詳細に筆を執っていた。『籠中記』の元禄4年(1691)から享保2年(1717)の26年間に、「疱瘡」の文字がしたためられた年は15年、延べ77日にものぼる。大半が疱瘡を患った個人名が記されているのであるが、流行した年として元禄7年「頃日、疱瘡夥敷流行す。間々死する者多し」(1.24)、宝永6年「頃日、江戸疱瘡夥敷流行す。死する者夥し」(1.24)、宝永7年「頃日、貴賤上下疱瘡夥敷今に流行。死する者も往々あり」(5.30)、正徳4年「頃日、疱瘡流行」(12.28)、正徳5年「頃日、疱瘡大に流行」(1.19)、「頃日、疱瘡にて死する者甚多し。一々不違枚挙」(3.29)とあり、上下貴賤、老若男女を問わずバタバタと亡くなっている。酒湯につけ、人参入りの粥を食し、医者にみせ、祈祷を行い、さらには夜着ふとんを紅色に拵えたりと、様々な対策が講じられはしたが決定的な治療法はなかったようである。こうした当時の状況を考えると、けいは幸い大事には至らなかったとはいえ、心身共に憔悴した日々を送ったに違いない。

その後数年間、けいに関する記載は親戚へ訪問したことが簡単にふれられているだけで、体調を気遣う言葉は1行も出てこない。元禄16年(1703)1月16日に「連催墮胎」、翌17日に「亥前ヨリ連虫痛。子過止。安く墮胎」と女中の連が墮胎した記事などを読むと、けいの心の中は察して余りある。

#### (4)離婚

そして、宝永2年(1705)1月7日ついに離婚となる。「巳刻けい広井へ。予、巳刻源右へ行。治部右と酒のみ、夕めし給、未半帰る。申此、親ヨリ予が妻離別する由の状を忠兵へ遣す。予は肝煎彦坂平太夫へ遣す」

この離婚を契機にして、けいは娘・おこんを朝日家に残してきたにもかかわらず、一切日記に姿をみせていない。また、それまで毎年、相当数の行き来があったけいの父である朝倉忠兵衛に関する記載もなくなり、さらに才兵衛、勘助、辰之丞、平右衛門ら朝倉家一同との親交も途絶えてしまった。

## 4 後妻「すめ」の外出行動と身体

### (1)すめと文左衛門との出会い

けいと離婚したその年の秋に、文左衛門は古田勝蔵の義理の妹であるりよ(後、改名してすめ



表2 後妻りよ(すめ)の籠中記への登場回数

	宝永3年 1706	宝永4年 1707	宝永5年 1708	宝永6年 1709	宝永7年 1710	正徳元年 1711	正徳2年 1712	正徳3年 1713	正徳4年 1714	正徳5年 1715	享保元年 1716	享保2年 1717	計	
親戚・知人訪問	古田勝藏(弥四郎)		1	1	4	1	11	3	10	18	7	7	6	69
	水野文四郎					10	15	10	9	7	6	3	4	64
	石川瀬左衛門						1	2	2	2		2	3	12
	林治兵衛					2		2	2	2		1	2	11
	水野勘太夫					3	2	2	1	1		1		10
	渡辺源右衛門				2	1	1		1				1	6
	小池奥左衛門						1		1				1	3
	渡辺七内			1	1									2
	柴山弥左衛門		1			1								2
	柴山文助					1							1	2
	自然院						2							2
その他6人計			1	1	2	6		1	2		3		16	
寺社参詣	熱田神宮		2	1			1	1				1		6
	善篤寺									2	2	1	5	
	石山			1									1	2
	円勝寺				1							1		2
	宝勝寺						2							2
	清浄寺						1	1						2
	天王											2		2
	津島											1		1
	政秀寺								1					1
	光明寺							1						1
	建中寺											1		1
	木ヶ崎						1							1
	長永寺						1							1
寺									2	1			3	
行業等	伏見町			1	1	1	1		1				5	
	施行見物							1	1			1	4	
	橋町				1								1	
	見廻						1						1	
身体	病氣・身体	1			7		6	3		1	5		1	24
	贈り物			1		1								2
計	1	2	7	17	25	51	26	30	38	21	24	24	266	

となる<sup>9)</sup>を客人として迎え入れ、翌、宝永3年(1706)9月27日に正式な妻とした。同日日記に「巳刻双親来り、客人を為妻。仍之祝義之強飯・吸物・酒等出之。謡曲有之祝万歳。尊父ヨリ小名吉十・尊母ヨリ綿・瀬左ヨリ鱸三本・源太左ヨリ小鱸三大鯛二。此外親類共に追々肴来る。略之」とある。客人というのは内縁の妻のことであり、りよを1年近くも正妻にしなかったのは、芥子川によれば、りよの出生が武家の出ではなく、海東郡東条村の百姓の娘であつたらしく、古田勝藏の妻の妹として朝日家に嫁ぐという手続きを踏んだようだ<sup>10)</sup>。以下、本論ではすめの「実家」は嫁ぐ直前の家ということで古田勝藏の家とする。

## (2)すめの外出行動

### 1)親戚宅訪問

後妻すめの外出も、前妻けいの場合と同様そのほとんどが親戚宅訪問であった。結婚生活13年間の全外出日240日の内(表2)、実家である古田勝藏宅への帰省が69日(28.8%)と最も多く、続いて義理の娘の嫁ぎ先である水野文四郎宅へ64日(26.7%)へ足繁く通っている。義理の娘とは文左衛門と先妻けいとの子でこんといい、その夫が久次郎<sup>11)</sup>で父親が文四郎である。こんは元禄8年誕生(1695)、10歳になった宝永2年(1705)に両親(文左衛門とけい)が離婚、父方文左衛門に引き取られ、後妻すめとは再婚時の宝永3年(1706)から、こんが結婚する宝永6

年(1709)まで3年間生活を共にした。すめはこの継子を非常に大切にしたいようで、それがこんが嫁いだ後もつづき、その証拠として数多いこんの嫁ぎ先、水野家への訪問という形になってあらわれている。自分の娘のあぐりが正徳元年(1711)に誕生してからも水野家への訪問は続いている。水野文四郎家のみならず、その親戚筋の水野勘太夫(10日、4.2%)や林治兵衛家(11日、4.6%)にも訪れていることは、水野一族とは相当懇意な間柄になっていたことがわかる。なお訪問回数第3位の石川瀬左衛門家(13回、5.4%)は文左衛門家の向いの家であった。

文左衛門と先妻けいがけいの実家とその親戚へ数多くたずねていたのが、離婚とともにぱったりと交流はなくなり、後妻すめと再婚が決まると文左衛門とすめはすめの実家とその親戚へ通うようになる。これはある意味で当然の行動である。そんな中で、文左衛門の母方の親戚筋である渡辺家へは、先妻けいも後妻すめも同様に少なからず訪問している。このことから母方の親族が文左衛門家の存続を背後でしっかりと見守っていたことがわかる。いいかえれば、嫁にとって実家と共に夫の母方の親族の存在が自らの身体を守っていくうえで重要な位置を占めていたということができよう。さらに、後妻にとって文左衛門家を守っていくうえで、先妻との子供を見捨てることなく親身になって養育していくことが大きな努めであったことは、上述のようにその娘が嫁いだ後もその嫁ぎ先へ頻りに訪れていることから十分にうかがい知ることが出来る。

## 2) 寺社参詣・行楽

寺社参詣は、毎年1回熱田神宮へ参拝している以外は、あまり多くなく、結婚生活13年間に善徳寺への5回を除けば、津島神社他十寺社に各1、2回でかけているに過ぎない。その他の外出として町巡り、芝居見物などの行楽があるが、すべて合わせて13回に過ぎない。これは先妻けいの行動パターンと類似しており、一般論として、武士の妻達女性達は、寺社参詣、芝居見物などの行楽は相当の楽しみであったには違いないが、ほとんどそのための外出行動はしておらず、外出の楽しみはもっぱら実家・親戚訪問という形で行われていたといえよう。

ここで、親戚・知人宅および寺社参詣・行楽などの外出行動に関して述べると、これも先妻けいの場合と同様、すめが単独で外出することは少なく、その多くが複数で連れ立って出かけていたことである。すめの総外出回数240回中、すめ単独は12回のみであった。複数では、文左衛門家揃って出かけたのが24回、2人連れで出かけた中では、夫の文左衛門と40回、文左衛門の母と18回、その他とが21回であった。3人連れでは夫・母とが60回(25%)で、この組み合わせでの外出が全外出行動の中で最も多かった。この3人に他の人が加わって出かけたのが24回あるから、それも加えれば35%にもなる。

さて、この外出行動の中で、先妻の子こんを連れて27回も出かけている。これはこんが結婚してからも、さらには実子のあぐりが誕生してからも続けられた。このことから前所述のとおり継子とはいえこんを随分とかわいがっていたことがわかる。その行き先はこんの実家、嫁ぎ先への付き添いが多かった。実の娘あぐりを初めて連れ出したのは誕生1カ月後の正徳元年12月9日で実家の古田弥四郎家であった。以後幼子あぐりとのお出は29回を数えたが、弥四郎家へ9

回、おこんの嫁ぎ先の水野家へ5回以外はほとんどが熱田神宮や善徳寺を初めとする寺社詣で(13回)であった。内、母(すめ)・娘という2人でのお参りが7回で、それに文左衛門が加わる場合が2回、おこんが加わる場合が2回数えられた。

これらを総合して、すめの外出行動は、先妻けいの場合がそうであったように、文左衛門家の誰かに付き添われてなされており、とくに夫の文左衛門(75%)か母親(63%)が連れだっており、この2人に見守られていたのである。

### (3)すめの身体一出産・病氣一

#### 1)出産

すめは娘あぐりを出産する前に2度の死産を経験している。1回目は宝永4年(1707)の10月であった。その3カ月前の7月22日に、「りよ着帯。円水室ヨリ赤白帯二筋、鯰三本と強飯来る。円水室と勝蔵と隠婆を呼、一汁三菜の夕飯出す」とあるように妊娠のお祝いをしているが、10月21日に「今日ヨリりよ少々悪寒あり。且咳(セク)。胎中甚静也。気色も少々不快」と寒気がし、咳をし、胎児は動かなくなり、翌22日「暁ヨリ腹少々いたみ、辰前薄血を見る。於是、穩婆を呼に遣す。終日虫一シキリ宛こはる。暮ヨリ乳張り、小腹引痛。昼と夜と玄奥両度来る。婆も夕飯後又来り、明日迄附添居す」と出血し、そして23日「昨夜八つ比ヨリ腹漸々痛む。暁前繩等を用意し、産所を拵ふ。卯前勝蔵来る。辰過玄奥も来る。辰半後小産女子胎死。然れ共産に産し、余り苦悩もなし。産後弥血心もなく、平気也。人参を少し煎じ出し、少しづつ煎薬へ入て用ゆ。粥に焼塩度々喫す。死子をうらに埋む。そめ腰を抱き、しげも手伝。おやつ小産すると其儘来り、直に終夜とき。酉過地震、しかれ共血心なし。終夜予不寝」と母体は無痛分娩で苦しまなかったが、女子胎死であった。こんな身体上の打撃があったため、りよは宝永5年(1708)にすめと改名している。世襲時、あるいは元服時に改名する男性とは異なり、女性が改名することは、仏門にはいるときは別として、ほとんどなかったと思われるので<sup>12</sup>、ここでは特異な例として記憶に留めておきたい。さて、そんな改名もむなしく、死産が続いた。

2回目は、宝永6年(1709)で、1月21日に着帯の儀式を行い「妻着帯、穩婆を呼」、2月、3月は、腹痛に苦しみ「夜半、スメ腹痛、寒慄あり、火燵にあたり小腹など暖しければ、漸々快くなる。子八刻、大に鳴、少ゆつすりとす」(2.21)、「おすめ腹痛、寒慄はなし。然れども常ならず、夜は快く寝る」(2.22)、「スメ、気色且腹中不快、廁に登んとするときは腹痛みて浚て快く不通」(3.29)、「スメ気色快然、痢亦留也」(3.30)。そして6月になると破血し、産婆を呼んで秘術を尽くしたが死産であった。「今朝、スメ少し薄血を見る。穩婆を呼、見せしむ。夜、おヤツ宿す」(6.8)、「スメ気色少々不快。腹亦少宛痛。申よりこはり出し、漸々に進み、酉刻産す。女子胎死。穩婆秘術を尽す。背二重になり出しを、もみ直して産しむ。忠次郎腰を抱。産後、長屋忠左衛門来り、薬を与ふ」(6.9)。「辰過ぎ、胎死子を西趣院へ遣し埋しむ」(6.10)と前回家の裏に胎死子を埋めたのと違って、お寺で埋葬している。体調回復のために人参が薬として使わ

れている。「スメ気色少々不快、気おもく食不進。戌過、忠左を呼に遣し脈を見せしむ。瘀血の熱ゆへ也、心元なき事なしと云々。薬を服せしむ。一貼に人三五りんづゝ入」(6.13)、「スメ気色属快然、夜あつしとて不得寝」(6.14)。

2年後の正徳元年(1711)5月16日に3度目の妊娠のお祝いがあった。「弥四郎宅に而すめ着帯。予家内行。日量・玄端・穩婆来る。昼こはめし。祝儀酒。夕飯給。暮前帰」。今回は実家の古田勝蔵(改名して弥四郎)宅で着帯の儀式が行われ、医師、産婆も招待されている。その後、すめの精神状態は、文左衛門の浮気のため、非常に不安定で、6月27日に嫉妬のあまり実家に帰り、翌日両親の呼び戻しに応じたものの、帰宅後大声でののしったので、今度は女中のえんが家出してしまった。「戌前すめ悪妬の余、そよ一人つれ弥四へ行宿す」(6.27)、「双親度々催促にて、昼前すめ来る。いぶり罵大言不止。えん、たへがたく未半出去」(6.28)。ただ、幸いにして3日後にえんは戻ってきた。「大幸にして、えん申前飯来」(7.1)。ところが、すめにしてみれば嬉しかろう筈もない。8月28日に「すめ悪妬殆通宵不寝」とあるように大爆発し、夜も寝られないほどであった。

なんとかこの危機を乗り越え、2カ月後の11月6日に産気付き、「すめ腰などいたみ、少々催すていゆへ、子比玄端もよび、弥四郎夫婦も来り、何も宿す。穩婆は昨夜ヨリ来り宿せり」(11.6)、翌7日に無事女の子が生まれた。「辰過催し有。則平産女子。一族知音来り賀す。文四と弥四夫婦は宿す。源右・勘太ヨリ各夜食来る。申比乳付来る。二歳女つれ来る。腰抱女も昨夜ヨリ来る」(11.7)。一時乳付け女性の世話にはなったが、翌日からは母乳を与えている。「すめ乳はり且乳付の子やかましきゆへ、暮前乳付を返す。先刻ヨリすめ乳をのましむ」(11.8)。翌9日に湯初め儀式が行われてから7日間「凡七夜の間、一族朋友昼夜来り飲食する事絶ゆる事なし。不可枚挙也」(11.9)とあるように、喜びの飲食に明け暮れていた。13日に女兒は母により「あぐり」と名付けられ、14日まで毎日多数の武士、町人よりお祝いの品として嶋えびが届けられた。

## 2) 病気

その後、すめの身体、病気に関する記載は激減し、年に1、2回風邪や頭痛についてふれられているだけである。正徳2年「亥半すめ吐逆。今日夕飯後ヨリ気色不快と云々」(6.21)、「暑。すめ快し」(6.22)、正徳3年「昼ヨリ家内弥四へ行。亥過帰る。子前帰。すめは風引不行」(1.17)、正徳5年「昨日ヨリスメ悪寒及び熱もあり。玄端薬を与ふ。深更悪寒熱ともにさめ少快と云し」(7.18)、「スメ今朝は少快とて、食も少給候処、辰半ヨリ又悪寒頭痛熱等あり臥す」(7.19)、「今朝スメ粥汁椀に二ツ給。悪寒もなく少快方也。されど、未頭痛熱は有て早臥也。夕飯後に御やつ、ならちや一重、に物、且さより二本持参。暮前に弥四も来り膳出す」(7.20)、「スメ本復快然たり」(7.22)。

## おわりに

本稿は元禄御豊奉行朝日文左衛門の日記『鸚鵡籠中記』の中から、文左衛門が記載した2人の妻けい(先妻)とすめ(後妻)の全文章を選択し、彼女たちの外出行動と身体について考察した。

文左衛門の妻達は武士の妻として良妻賢母を演じるだけでなく、大声でののしり、喧嘩し、家出し、離婚もした。その姿は、良妻賢母たる武士の妻像を覆すものであった。それ故に、従来の『籠中記』関連の論文、小説では、その悪妻奇異性を強調するものが大勢を占め、かつ酒好き女好きの文左衛門にその責はあるとして、文左衛門を非難するものも多かった。

こうした夫婦間の亀裂に対して異を挟む余地はないが、妻達の日記への登場全記録を吟味した結果、日常生活上、妻達が家に閉じこもっているのでは無く、頻繁に外出していたこと、それもその多くが実家を含めた親戚筋への訪問という形をとっていたことが明らかになった。その際、妻が単独ででかけることはむしろ希で、ほとんどが複数で出かけていたこと、なかでもその相手は夫である文左衛門、ないしは文左衛門の母が多数を占め、さらには夫と母との3人連れの場合も多く、文左衛門家族に見守られて外出していたことは注目される。とくに後妻すめの行動分析において、そこには嫁と姑の対立、あるいは嫁と継子の対立というかけからは微塵もなく、すめが姑の実家・親戚を訪ね、かつ継子の嫁ぎ先にも顔を出しているという行動は、文左衛門家を守っていこうというけいな姿勢が読み取れる。それに加えて文左衛門自身および文左衛門の母も嫁の実家に足繁く通っている。とかく、従来の研究書や書物において、ヒステリックな嫁、ふしだらな夫という極端な面しか伝えられてこなかったが、本稿では、出産・病気を気遣う文左衛門や外出に同行する文左衛門を通しての夫婦愛、さらには夫婦、母、子の外出行動を通しての家族愛といった面も読み取ることができた。

謝辞：『鸚鵡籠中記』のデータベース作成にあたっては、城北学園中学・高等学校教諭の村田祐介氏ならびに愛知県史編纂室の溝口智代氏に多大な尽力を得た。両氏に篤く感謝します。

\*1 原本は徳川林政史研究所に保管されている。

\*2 市橋鐸監修『名古屋叢書』続編(1966)

\*3 神坂次郎『元禄御豊奉行の日記—尾張藩士の見た浮世』中公新書、1974。

\*4 小池富雄「『鸚鵡籠中記』の再検討—編纂書の性格と成立の経緯—」、徳川黎明会『金鯢叢書』9、1984、412-439頁。

\*5 林由紀子「近世前期の女性」、新修名古屋市史編集委員会『新修名古屋史』第3巻、1999、314-330頁。

\*6 溝口常俊編『江戸期なごやアトラス—絵図・分布図からの発想—』名古屋市長務局、1998、70-71頁。

\*7 村田祐介「尾張藩士の生活行動空間を復元する」『地理』49-2、2004、80-85頁。

\*8 「けい」は日記に、けい、ケイ、慶、御慶と表記されている。本文中ではひらがなで「けい」に統一し

て示した。なお、「家内」は家中の人々という意で使っているが、その中にけいも含まれているとして、表1を始めとして、けいの登場回数を示す場合にその数に加えた。

\*9 宝永5年1月1日の「母・すめ・こん熱田へ詣」から「すめ」となる。

\*10 芥子川律治『尾張の元禄人間模様』中日新聞本社、1969、5-6頁。

\*11 水野久次郎は、30石取りの尾張藩士で、正徳6年4月28日に御林奉行の職に就いた。

\*12 宗門人別帳では、女性は幼少時に実名が記されているが、結婚以後は「妻」「女房」「母」という世帯主との続柄のみ記されるようになってしまう。

**Abstract**

Described Body of Wives and their Behaviour for Going out in the diary  
of a warrior of Owari-han, Tokugawa Japan

MIZOGUCHI, Tsunetoshi

The purpose of this paper is to examine how a warrior describe his wives' body and their behaviour for going out on his diary: Ohmurochuki 1698-1717. His name is ASAHI Bunzaemon who was charged as a magistrate of Owari-han. Though former papers and novels described him as a heavy drunker and lechery man, it is found he was honestly helping both of his former wife and second wife when they got sick, had baby or went out of house. For the women those days, pregnancy and delivery were very sever, and they were frightened of epidemic disease, especially smallpox. First wife affected this disease. By various treartment such as bathing in the sake bath, eating rice gruel with carrot, praying, wearing red-colored etc., she, fortunately, recovered. Second wife had a stillborn baby twice. Destination of going out were mostly their native houses and sometimes temples and shrines. It is worthy noted wherever they went out Bunzaemon and his mother often escorted them. Second wife Sume often went outside with firstt wife's daughter, and after she married, Sume began to visit the daughter's married house.